氏　　名	邱（チュウ）　奕堅（イー チェン）
学位の種類	博　士　（美　術）
学位記番号	博　美　第 311 号
学位授与年月日	平成23年 3 月25日
学位論文等題目	〈作品〉廃墟遺跡 〈論文〉「台湾・中国・日本に於ける1980年代以降の現代写真芸術」について
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　伊　藤　俊　治
（論文第１副査）	〃　准教授　（　〃　）　鈴　木　理　策
（作品第１副査）	〃　教　授　（　〃　）　佐　藤　時　啓
（副査）	多摩美術大学　〃　港　千　尋

a．氏名：邱 奕堅（CHIU, I -Chien）
b．専攻：先端芸術表現
c．出身地：台湾台北
d．略歴：
　1962　台湾台北生まれ
　1991　日本大学芸術学部写真学科卒業
　1994　アカデミー・オブ・アート大学写真専攻、修士課程修了、サンフランシスコ
　2003　中華撮影文化協進会、理事長、台北、台湾
　2009　1839当代ギャラリー、ディレクター、台北、台湾

e．主な個展：
　1994　『The Land』アート・ギャラリー、サンフランシスコ、アメリカ
　1995　『水』台北フォト画廊、台北
　1999　『石』台湾国際視覚芸術中心、台北、台湾
　2000　『水と石』高雄医学院附設中和紀念学院南杏画廊、高雄、台湾

f．主なグループ展：
　1997　『台湾フォトグラファーズ交流展』魯迅美術学院、審陽、中国
　1997　『国際ヤング・フォトグラファーズ展』、大丘、韓国
　2003　『Heart to Ecology アジア・フォトグラファーズ展』富士フォトサロン、名古屋

g．展覧会企画：
　1998　『写真芸術のオリジナル・プリント展』誠品敦南芸文空間、台北、台湾
　2000　『第三回台北国際撮影節』孫文記念館、台北、台湾
　2002　『アジアフォトビエンナール』ソウル、韓国
　2002　『アジア人写真家たちの「スーパー、リアル」な生活』横浜ボートサイトギャラリー、横浜

（論文内容の要旨）

本論文ではこれまでの研究テーマをふまえ、アジアをキーワードとし、母国台湾の写真および周辺国家の事例を検証してゆきたい。東アジアの国々の共通項として1980年前後の政治経済の大きな変化は見逃すことはできないだろう。台湾は貿易工業立国としての経済発展があり、中国では開放経済が始まり、日本ではバブル経済があるという具合に、それぞれの国で時間的差異はあるにしろ同様の社会問題も包含しているはずである。それゆえ『1980年』前後を念頭に置き、台湾を中心にした周辺国家の写真文化の発展についてここでは考察してゆきたい。

二十世紀最後の二十年、台湾、中国、日本における写真芸術はその表現法においても、創作理念においても劇的な変化を遂げた。特にこの二十年は、数多くのアジアの芸術家が写真媒体を用いて、アジアンコンテンポラリーともいうべき新たな芸術領域を展開している。また彼らが国際ビエンナーレ、トリエンナーレといった桧舞台に立つようになったことで、欧米を中心とする現代美術の世界でも注目を浴びるようになった。

台湾では1980年以降、写真専門ギャラリーの開設ラッシュの動きがあり、ジャズ写真画廊、台北写真画廊、台中写真画廊、台湾国際視覚芸術中心などが林立する様相を見せた。これと相前後し、欧米、日本で写真を学んで帰国した学者も急速に増えた。現在では三十名以上の写真関連領域の博士や修士の学位を得た元留学生の学者が教育現場に従事し、後進の育成にあたっている。こうして施設や人材の両面から創作活動を行う土壌を養ってきたことが、この二十年来の台湾の写真芸術を支える要因となり、多大な影響を与えている。

一方、中国大陸では1978年、中国共産党結党後初の改革開放経済の新国策を打ち出したことが大きな転機となり、以降、高度経済成長を遂げ、文革時代の貧困から脱却し、国民の思想や思考に影響を及ぼしたのみならず、芸術表現の方法にもおおいに影響を与えた。現代中国の芸術はもはや政治プロパガンダの為の道具ではなくなり、個人の表現手段として変貌したのである。写真表現もいうまでもなく、この恩恵を受けて発展し始めることになる。また同じ中国語圏である台湾や香港といった周辺国からの資本や人材の導入は経済にとどまらず、資本主義国家の文化流入の仲介役となり始めた。

そして日本においては、戦後世代というべき新しい写真家達が1980年代から国際舞台に進出し、世界の注目を浴びるようになった。戦前生まれの著名な写真家はそれ以前にも数多く存在したが、海外に居住し創作活動を行う者、国内よりもまず海外で作品が認められるもの、あるいはキュレーターにより意図的に日本文化の特性として海外に紹介される例など、作家の多様性が担間見られるという点では日本でもこの時代は転換期と捉えて良いだろう。日本がカメラやフィルムといった写真産業の大国であるのみならず、写真技術や写真教育の面でもアジアの指針となっていることはまぎれもない事実であり、それゆえ日本の写真家はいちはやく国際的な注目を受けることが出来たのである。

以上のような時代動向と写真表現の展開を結合させ、基軸となすことで『台湾、中国、日本における1980年代以降の現代写真芸術』について考察してゆきたい。本論文は三国の現在の写真文化を堀り下げて論証することとなり、ひいては相互理解を深める要素となりうるであろう。三国間の文化交流や芸術発展に寄与する、社会的貢献度の高い研究となることを切望し、これを進めたい。

また博士後期課程の写真制作においても大きく変容する『現代都市』の様相から派生する問題を取り扱う。国の政策下で都市は形づけられ、それとともに周辺の環境は変容させられていくものである。論文テーマに則した実践的な作品制作を進めてゆくことで、研究の更なる深化に励みたい。

（博士論文審査結果の要旨）

邱奕堅は、台湾からの留学生であり日本と米国で写真を学んでいる。欧米から見れば東アジアの国々

は極めて似通って見えるが、しかしながら、視線を間近にクローズアップして行くと急激にその違いが拡大して行く。欧米の文化も日本の文化も中国の文化も自ら体験している邱が、本論文をまとめる動機は際立っており極めて重要である。

欧米中心の近代史にから、現代、特に21世紀に入ってからの東アジアの写真を含む芸術領域の躍進は経済的発展と相まって目覚ましい。筆者も書いているように、東アジアでは歴史上の長期間に渡り中国が君臨し、仏教・儒教の文化が東アジアに大きな影響をもたらした。しかし近代化の過程での敗戦があり、また社会主義国として文化大革命の影響により長い間文化的な面が凍結状態であった。しかし1978年からの改革開放経済路線によって、急激に再大国化している。中国の近年はオリンピック・万博を経て、今まさに絶好調といえるだろう。日本は、近代化をうまく乗り切り世界大戦を敗戦するものの急激な経済発展があった。しかし、バブル経済以降の長期に渡る経済停滞は社会問題となっている。

一方その間に翻弄されてきたのが、台湾である。日本の植民からの解放後も、国民党政権によって長期に戒厳令がしかれ、白色テロと喚ばれる台湾人の思想統制や虐殺があった。したがって、自由な表現が台頭するには、1980年代まで待たなければならなかった。戒厳令の解除は1987年であり、中国の台頭や、日本のバブル経済、世界的な写真ブームとも相まって、３国の写真芸術の関係は非常に興味深く急激に発展したといえる。

このような激動する時代に視点を置き、自らの出身国である台湾を中心に据えて、ことさら影響の多い中国と日本との間の関係性から現代写真の系譜を探ろうとする本論文は、台湾のみならず我が国でも極めて貴重なものであり、本学博士課程論文として合格に相応しい。

（作品審査結果の要旨）

邱奕堅の作品「廃墟遺跡」は、日本統治時代に台湾で建設され、現在は廃墟と化した工場群を撮影した作品である。精密な再現性を持つ８×10カメラを選択し、カラーフィルムで記録された写真作品は、大判に引き伸ばして展示することにより、映像の空間化が図られている。この展示方法は、写された場所についての歴史的・社会的な意味づけを喚起する情報性だけでなく、無機質な壁や金属といった物質の質感、そこに存在した光を視覚的に経験させるものである。撮影における目的意識は展示方法とそのイメージを含むものであり、台湾・中国・日本の写真史を研究し、それぞれの特色や表現可能性を踏まえた上での独自の形式を手に入れている。アジアの写真状況を俯瞰的に捉え、写真表現の形式とそれが表すものとの関係を問うものとして意義深い。以上の理由から学位授与に値すると考え合格とする。

（総合審査結果の要旨）

論文内容は中国と日本の間にはさまれながら独自の写真表現の展開をしてきた台湾の近現代写真についての研究考察である。半世紀に渡る日本の植民地時代を経て、1980年代以降、特に戦後四半世紀も続いていた戒厳令が解除されて以降の表現の自由化や経済発展、さらに中国の開放経済の広がりのなかで大きく変容してきた台湾の写真の流れを、民族意識の発生、メディアや都市状況の変化、原住民問題など独自の視点からとらえ、台湾の現代写真史を描こうとするものである。日本語としての完成度はまだまだだが、いまだ本格的な台湾写真史が書かれていないこともあり、注目すべき論考である。作品も8×10の大型写真で植民地時代の工場群を独特の色彩と造形感覚で結晶化している。以上の観点から審査教員会での協議の結果、合格とする。